The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	劉牧易の諸問題 ： 河図洛書との関わりから
Author(s)	辛, 賢
Citation	大阪大学大学院文学研究科紀要. 2022, 62, p. 1-27
Version Type	VoR
URL	https://doi.org/10.18910/87425
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

劉牧易の諸問題

―河図洛書との関わりから―

辛　賢

はじめに

劉牧については判然としないところが多い。正史に伝記はなく、『宋元学案』（泰山学案「運判劉長民先生牧」）にその伝が見えるものの、古くから劉牧の事跡についていくつか疑義が呈されてきた。かつて戸田豊三郎氏は、当代に劉牧と同姓同名の人物がいて、両者の事績が入り交じって伝わってきた可能性があると指摘した。(1) その後、この問題は長きにわたって注目されることなく曖昧にされてきたが、(2) 近年、中国の郭彧氏によって新たな考察が加えられ、極めて興味深い見解が出された。(3) とりわけ注目すべきは、今日に伝わる『易数鉤隠図』には後世の改竄と思われる異文が混入されており、その異文の多くは河図洛書に八卦の起源を求める内容を色濃く含んでいるということである。さらに北宋末の朱震が「進周易表」のなかで伝える河図洛書の系譜について、劉牧が范諤昌から河図洛書を授かったという記述は、范・劉両者の事跡からして歴史的事実とは認めがたいものがあり、よって劉牧の易学は河図洛書の説とは無関係であるという見解が出されたのである。郭氏の考察は、極めて説得力の高い論証になっており、従来の定説を覆すものであるといえよう。

戸田・郭両氏の考察は、劉牧易の研究、さらには宋代易学研究の新たな地平を切り開く可能性を内包するものと考えられ、本稿では両氏の考察内容を踏まえながら、劉牧易をめぐる諸問題を整理してみたい。

一　劉牧二人説

今日に伝わる『易数鉤隠図』によると、「三衢劉牧撰」とあり、「三衢」（浙江省衢県）を劉牧の本籍として伝えている。ところが、本籍を含む字や官職など、劉牧の事跡については不明な点が多く、古くから疑義が呈されてきた。

中興書目に云く、新注周易十一巻、本朝太常博士劉牧撰。呉秘表進し、田況序す。牧、字は長民、彭城の人なり。仁宗の時、数を言う者、皆之を宗とす。又、周易卦徳通論一巻有り。元亨利貞の四時を論ず。又、鉤隠図一巻有り。天地奇耦の数、太極の両儀を生じてより下りて河図に至る。凡そ六十四位、之を点して図を成す。図の下において各々其の義を釈す、と。（馮椅『厚斎易学』所引）

劉長民易十五巻、皇朝劉牧長民撰。仁宗の時、数を言う者、皆之を宗ぶ。慶暦初、呉秘其の書を朝に献じ、優詔もて之を奨む。田況、序を為る。鉤隠図三巻、劉牧撰。皆易の数なり。凡そ四十八図并びに遺事九に欧陽永叔の序有るも、其の文、殊に類せず。（『郡斎読書誌』巻一上「易類」）

新注周易十一巻、卦徳統論一巻、略例一巻、又易数鉤隠図二巻。太常博士劉牧長民撰、黄黎献之が序を為る。又た略例図を為り、亦た黎献の序する所なり。又、三衢の劉敏士が浙右の庾司に刻するもの有り。欧陽公の序有り。文浅俚にして決して公の作に非ず。其の書三巻、前本と大同小異なり。案ずるに敏士の序に称するに、伯祖の屯田郎中、臨川先生其の墓に志す。今、誌の文の述ぶる所を観るに、但だ春秋を孫復に学ぶと言うのみ。慶暦の時に当たり其の易学盛行し、応に略すべからざるに一語の之に及ぶ無し。且つ黎献の序に字を長民と称するも、誌には字を先之と称す。其れ果して一人か。抑も二人か。（『直斎書録解題』巻一「易類」）

これらの資料によれば、劉牧の字は長民、本籍は彭城（現在の江蘇省徐州市）、官職は太常博士である。現行本『易数鉤隠図』に本籍

を「三衢」と記しているのと相違していることが分かる。

『郡斎読書誌』（以下『読書誌』）によれば、劉牧易は、仁宗の慶暦元年（一〇四一）、呉秘の献書によって推奨されるようになり、数の学を修める者たちの間で第一のものとして尊ばれた。著述に「劉長民易十五巻」があるが、『直斎書録解題』（以下『解題』）に「新注周易十一巻」「卦徳統論一巻」「略例一巻」「易数鉤隠図二巻」などがあり、その詳細を窺い知ることができる。

ところが、『解題』によると、三衢の劉敏士が浙右（浙江衢州）の提挙常平司（庾司）にて翻刻した別本（三巻本）があり、それには欧陽修の「序」が付されていたらしい。欧陽修の「序」は、現行本『易数鉤隠図』から見ることはできないが、晁公武は「文、殊に類せず」と、欧陽修の文体ではないと疑問を呈し、後の陳振孫も文の粗雑さから欧陽修の作ではないと断定している。戸田氏は、この偽作説について次のように述べている。

永叔が河図洛書を信用していなかったこと、その易学について見れば明らかであるから、鉤隠図の序文を書くとは確かに考えられぬことである。隨って、永叔序を載せた三巻本に、先ず不審を抱く。今日に見ることの出来る鉤隠図は、通志堂経解に収められた三巻本で、四庫全書の解題によると、それは道蔵から録出したものだと云う。是の書、永叔の序は刪去されて、劉牧その人の自序を載す。(4)

すなわち、河図洛書の説を排撃していた欧陽修の学問的立場から考えて、自ら『易数鉤隠図』に序文を寄せていたとは考えがたいとし、戸田氏は陳振孫の偽作説にしたがっているのである。

孔子没してより周衰え戦国に接ぎ、秦遂に六経を焚書するに、是において中絶す。漢興り、蓋し久しくして後に其の散乱磨滅を出づるに既に其の伝を失う。然る後に諸儒因りて得て其の異説を其の間に措く。河図洛書の如きは怪妄の尤も甚しき者なり。余嘗て哀しきかな。学者は経を守りて信を篤くするを知るも、偽説の経を乱すを知らず。（『文忠集』居士集四十三「廖氏文集序」）

このように欧陽修は河図洛書の説に対し、経を乱す偽説であるとして批判的な立場を取っていたことは周知のことであり、『易数鉤隠図』に序を寄せていたとは考えられない。では、どのような経緯で欧陽修の序が偽作され、三衢劉敏士の別本に付されるようになったのだろうか。

『解題』によると、「敏士の序に称するに、伯祖の屯田郎中、臨川先生其の墓に志す」とあることから、劉敏士は劉牧の孫甥であることが分かる。孫甥の敏士が三衢の庾司にて伯祖の著述を翻刻したのであるが、注目すべきは、敏士はその序に「伯祖の屯田郎中」と述べ、劉牧の官職を太常博士ではなく、屯田郎中と記している点である。すなわち、彭城出身の太常博士劉長民牧と、三衢出身の屯田郎中劉先之牧とで、これは同姓同名の別人なのか、それとも同一人物なのかについて疑問の残るところとなった。

（一）劉先之について

さてここで、実際に墓誌の内容を確かめてみたい。墓誌は、臨川王安石が劉牧の死を悼んで記した「荆湖北路転運判官尚書屯田郎中劉君墓誌銘并序」がそれであり、王安石の『臨川文集』に収められている。長文ではあるが、全文を取りあげることにしよう。

荆湖北路転運判官尚書屯田郎中劉君墓誌銘并序。

治平元年五月六日、荆湖北路転運判官尚書屯田郎中劉君、年五十四にして官を以て卒す。三年もて十月某日に卜(うらな)いて真州揚子県蜀岡に葬る。而して子の洙は武寧の章望之の状（行状）を以て来りて銘を求む。噫、余が故人なるや、序を為りてここに銘す。

序に曰く、君の諱は牧、字は先之。其の先は杭州臨安県の人なり。君の曾大夫の諱は彦琛、呉越王将と為り、有功刺衢州もて西安に葬らる。是において劉氏又西安の人と為る。太宗の時に当たりて、嘗て呉越に諸功有る者を求め、其の後を録するも、君の大父、諱仁祚は辞するに疾を以てし、及び君の父、諱知礼もまた仕えざるに郷人称して君子と為す。後に君の故を以て官を贈り、尚書職方郎中に至る。君少きときは則ち明敏にして、年十六にして進士に挙せらるるを求むるも中らず。曰く、有司豈に我を枉げんや、と。乃ち多く書を買い戸を閉ぢ之を治むるに再挙に及びて遂に挙首せらる。家を起こすに饒州軍事推官にして、州の将と公事を争いて擠(お)す所と為り、免れざるに幾し。後に将の范文正公至るに及び、君大いに喜びて曰く、此れ吾が師たり、と。遂に以て師

と為す。文正公も亦た数しば君勉めて以て学ぶを称う。君は仁恕を論議し、人の窮するに急して、財物において顧計する所無し。凡そ文正に慕うを以ての故なり。弋陽の富人、客の誣する所と為り、将に死に抵(いた)らんとするに、君、実を得て以て文正公に告ぐるも、未だ甚だしくは信ずるにあらず。然れども君の故を以て吏をして雑(とも)に之を治めしむ。居ること数日にして富人は死せざるを得。文正公は此れ由り愈々君を知り任ずるに事を以てす。歳の終わりに将に京官に君を挙ぐるも、其の同官に親有りて老いる者に譲るを以て、文正公は歎息を為して之を許して曰く、吾れ以て君の善を成さざるべからず、と。文正公、河東を安撫するに及び、乃ち始めて君を挙げて治劇すべし。是において君は兗州観察推官と為り、また春秋を孫復に学び、石介と友と為る。州の旱蝗に便宜十余事を奏す。其の一事に登・莱（登州・莱州のこと）の塩商を通すを請うに今に至るまで以て頼りを為す。大理寺丞に改め、知大名府館陶県となる。中貴人、契丹使に隨いて往来し、県を擾すこと多し。君、視遇して理むる有るに、人吏以て苦しむ所無し。是れに先んじて盗多く、君、其の党を用いて推逐し、発して輒ち得る有るに、後に遂に盗を為す者無し。詔あり、強壮を集め、其の手に刺して義勇と為すに、惶怖多くして為す所を知らずして走らんと欲す。君、諭すに詔意を以てし、利害を言と為さば、皆刺に就き、欣然として曰く、劉君、吾れを欺かざるなり、と。留守は其の能を称えて、府事と雖も往々として君に咨りて策を計る。通判広信軍に用挙する者あるも、親の老ゆるを以て行かず、通判建州となる。是の時に当たりて、今河陽の宰相富公、枢密副使を以て河北に使いするに、君の機宜文字を掌るを奏す。保州兵士の乱を為すに、富公、君に撫視するを請う。君、長垣自り駅に乗りて其の城下に至るまで三日を以てす。会(たまたま)富公罷めて出づれば、乃ち建州に之く。属県の諸里を并せて、其の徭役を均しくするに、人大いに喜ぶ。而れども職方君の喪に遭いて以て去る。通判青州となり、又、母夫人の喪を以て罷む。又、通判廬州となる。朝廷、茶榷を弛めて、君を以て江西に使いして、其の税を均しくするを議せしめ、期年を蓋して後に反る。客曰く、平生、君の敏にして敢えて為むると聞く。今、濡滞して此の若きは何故か。君笑いて曰く、是れ固より君の能くする所なり。易なるも、我れ則ち能くせず。且つ是の役や、朝廷豈に以て它を為さんや。亦、人を愛するのみ。今、深く其の利害を知らずして、苟も簡以て之を成さば、君、吾れを以て敏と為すと雖も、人は必ず其の弊に勝たざる者有り。事を奏して皆聴くに及び、人果たして之を便にす。広南西路転運判官に除せられ、是に於いて、険阨を修め、丁壮を募りて、以て戍卒を減らし、倉を徙して輸に便にし、摂官の功次を考えて、其の行賕を絶つ。居ること二年、凡その利害の興廃せざる所無ければ、乃ち荆湖北路に移り、月を踰ゆるに至りて卒す。家貧しく

以て喪を為す無く、棺椁自り諸物、皆荊南の士人の具うるを為す。君、江氏を娶りて五男二女を生み、男は洙・沂・汶と曰い、進士と為る。洙は君の故を以て試將作監主簿となり、余りはなお幼し。初め君は范・富二公の知る所と為り、一時士大夫は争いて其の才を誉むるもまた慨然として自ら以て当に意を得べくも、已にして屯遭流落して、抑(そもそも)庸人の中に没して老ゆるに幾し。乃ち稍(ようや)く出でて世用と為り、将に以て為す有らんとするが若きや、而れども既に死す。此れ君を愛する者の恨惜を為す所なり。(『臨川文集』巻九十七)

劉先之、名は「牧」、字は「先之」、英宗治平元年(一〇六四)五月六日に歿した。没年から逆算すると、生年は真宗大中祥符四年(一〇一一)となる。仁宗天聖四年(一〇二六)の十六歳の時、進士に応試するも落榜し、再挙の末、首席で官に就いた。墓誌からは任官の時期を特定することはできないが、『浙江通志』巻百二十三に「劉牧、西安人、屯田員外郎」(「景祐元年甲戌張唐卿榜」)とあることから、仁宗の景祐元年(一〇三四)の二十四歳の時に任官したことが分かる。落榜してから任官まで、八年もの開きがあることに疑問の残るところではあるが、先之のおよその活躍時期は仁宗から英宗年間に当たると言うことができる。

先之ははじめ饒州軍事推官に就いたが、州将と公事で争いになり、罷職寸前にまで追い込まれた。仁宗の景祐三年(一〇三六)、范仲淹が饒州の知事に赴任することになり、それが縁となって范仲淹に師事した。康定元年(一〇三四)頃、范仲淹の推挙によって兗州推官に就き、この時期に孫復に従って春秋を学んだ。以上、墓誌の内容を確認したが、さらに劉先之の事績をうかがえるものとして次の資料が挙げられる。

柳開・穆修・張景・劉牧、時に当たりて古文を能くすると号せらる。今存する所の「来賢」「河南尉**厲**壁」「法相院鐘」「静勝」「待月」の諸篇に見る可し。時に偶儷を以て工巧なること尚と為す。……契丹と和して前の四十年に、劉牧は張損之を送り、後の四十年に蘇洵は石揚修を送り、張耒は李之儀を送る。(葉適『習学記言』巻四十九「呂氏文監」)

劉先之は柳開・穆修・張景と並んで古文をよくするものとして知られ、呂祖謙の『宋文監』に柳開の「来賢亭記」、張景の「河南縣尉

麗壁記」、穆修の「亳州法相院鐘記」「静勝亭記」、劉牧の「待月亭記」が残されている。そして、契丹と澶淵の盟（一〇〇四年）を締結して四十年後の仁宗慶暦五年（一〇四五）に張損之を国境へ送る際に付した贈序「送張損之赴任定府幕職序」が今にも伝わる。

さて、臨川墓誌をもとに書かれたと思われる『宋元学案』劉牧伝には次のように記している。

劉牧、字は先之、号は長民、衢の西安の人なり。年十六、進士に挙げらるるも第せず、曰く、有司豈に我を枉げんや。乃ち書を買い戸を閉じ之を治め、再挙に及びて遂に挙首と為る。調州の軍事推官として州の将と公事を争い、擠す所と為り、免れざるに幾し。（中略）先生又易を范諤昌に学び、諤昌は許堅に本づき、堅は种放に本づき、実は康節と自りて出づる所を同じくす。其の門人は則ち呉祕・黄黎献なり。祕は其の書を朝に上り、黎献は之に序す。卦徳通論一巻、鉤隠図三巻、先儒遺論九事一巻あり。

（『宋元学案』泰山学案「運判劉長民先生牧」）

黄宗羲は、従来の疑義にとくに注意を向けることはなく、「劉牧、字は先之、号は長民、衢の西安の人」（『宋元学案』「泰山学案」）と述べ、「先之」と「長民」とを同一人物として見なしていることが分かる。そして「年十六にして」以下の文は、劉先之の墓誌に基づき節録したものであり、末尾に劉牧の学問系譜と著述を列挙している。ちなみに清代の陸心源は「字は長民、一は字先之」（『宋詩紀事補遺』）と記し、また清・呉焯は「牧、字は牧之」（『繡谷亭薫習録』）とも記しているが、『四庫全書総目提要』に「牧、字は長民。其の墓志に字を先之に作るも、未だ孰れか是なるかを詳らかにせず。或いは両字有り」と述べ、やはり清代の学者の間でも未解決の問題として残されていたことが分かる。

戸田氏は墓誌に「起家饒州軍事推官」とあるのに対して、『宋元学案』の伝では、「調州軍事推官」と改めていることや、兗州観察推官となって山東へ出た劉牧が孫復に学んで、石介と友となるには年代が合わないこと、そして太常博士の任官の事跡が墓誌に出て来ないという点などを挙げ、次のような結論を下している。

三衢の劉敏士は、伯祖劉牧をば顕彰し、併せて自己の姓名をも伝えるために、偶々姓名を同じくした彭城の劉牧の著作中、尤も

宣伝せられた鉤隠図を取り、之に欧陽永叔の序文を偽作附加して上梓したのではなかろうか。然し、永叔の序文から馬脚を露わすこととなって、茲に范文正推挙の劉先之牧と、太常博士の劉長民牧とを区別すれば、上に数え上げた疑問は凡て解消するのである。

戸田氏は、劉敏士の伯祖劉先之牧が劉長民牧と偶々同姓同名であったことから、著名な『易数鉤隠図』を翻刻し「三衢劉牧選」と本籍を改め、欧陽修の偽序を付したのではないかと推定したのである。戸田氏の研究は、発表されて以来、約六十年もの歳月が経っているにも関わらず、古びていない。郭氏は戸田氏の論考についてとくに触れてはいないが、当代に同姓同名の劉牧が存在し、その一人は彭城出身の太常博士の劉長民であり、もう一人は劉敏士の伯祖に当たる三衢出身の屯田郎中の劉先之であると述べ、戸田氏と同様の見解を示している。

（二）劉長民について

劉先之に比べて、劉長民の事跡を窺い知れる手がかりは数少ない。ところが、郭氏の考察によって劉長民の任官時期を知る決定的な証拠が提示され、それによると、劉長民は劉先之より三十年前に任官していたことが明らかである。以下の資料に注目したい。

景徳二年三月試草沢劉牧**策**二道（奉聖旨撰）

問化成之道、儒術為先。故大学之興、存於周礼。博士之設、始於秦官。歴代相沿、旧章咸在。国家盛膠庠之制、崇俊造之科。鏤版以広聖言、祭菜以厳祀典。伝経請益、必選碩儒。講肄胄筵、咸稽古訓。而公卿之子弟、鮮隷籍於成均。州里之俊髦、率登名於**鄉**老。豈勧誘之未至、**将**沿襲之或殊。何以復杏壇槐市之規、遵小成大成之制。弦歌不輟、誕揚洙泗之風。生徒寖多、克追唐漢之盛。願聞嘉話、用洽永図。（楊億『武夷新集』巻十二「策問」）

問古者井田之設、兵農混焉。居常力耕、不離於畎畝。有事調発、爰執於干戈。蓋三代之旧章、歴戦国而無改、施及秦漢、沿襲漸殊。京師建南北之軍、郡国有材官騎士。内増七校、外置樓船。自是已来不能復古、而況五材並用、誰能去兵。天下雖安、未可忘戦。今

国家勤修武備、式遏外虞。所以保障黎元、震耀威徳。**将**何以追司馬六軍之制、遵提封百万之規、免飛芻輓粟之労、成家給人足之美。寓令於疆畔、其術如何。講事於蒐苗、厥旨安在。願聞婉画、以闡大猷。（楊億『武夷新集』巻十二「策問」）

楊億の『武夷新集』には、景徳二年（一〇〇五）に行われた策問に対する劉牧の答案が収められており、(5) これによって劉牧は景徳二年に任官していたことが明らかである。劉先之が生まれる大中祥符四年（一〇一一）より六年前のことである。さらにまた、劉牧の事跡を裏付ける貴重な資料として提示されたのが、次の『玉海』の記載である。

宋朝、文武の軽重の偏無く、武臣に文学を以て文資を授けらるる者有り。興国三年に王操、淳化二年に和嶧、咸平三年に銭惟演の若し。文臣に智畧を以て右職に易え、邉寄に当たる者有り。雍熙四年に柳開、祥符九年に高志寧、天聖元年に劉平、四年に劉牧、慶歴七年の楊畋、皇祐四年に蘇緘、治平二年に种診諤、三年に种古及び張亢・劉几・李丕諒の属の若し。熙寧五年三月戊戌に文武換官法を立つ。(6)（『玉海』巻百二十七「官制」）

これは北宋期に推進された文武換官による人事異動を述べたものである。換官とは文官（文資）と武官（武資）との間に換えることであり、文武を一体とみなし軽重をつけずに互換的に運用するために推進された官僚制度であった。制度化されたのは熙寧五年であるが、古くから柔軟に運用されてきたのである。(7)『玉海』によれば、劉牧は仁宗の天聖四年（一〇二六）に換官の対象となったことが確認される。郭氏は、これらの証拠から、彭城劉牧（長民）は「宋の真宗景徳二年（一〇〇五）に任官してのち、太常博士に進み、宋の仁宗天聖四年（一〇二六）にその知略が認められ右職（武官）に転任、辺境の武官に赴任した」と指摘している。(8)

宋咸易補注十巻、易訓三巻、王劉易辨二巻。至和中、咸（宋咸）以て既に易に補注して以て其の余りの百余篇、大いに疑うべき者有るは三十有六、題して易訓と曰う。（中略）康定元年、自ら易辨を序して曰く、近世の劉牧、既に鉤隠図を為りて以て象数を画す、と。（『周易本義啓蒙翼伝』中篇）

北宋の宋咸が著した「王劉易辨二巻」は、王弼易と劉牧易を批評したものであり、仁宗の康定元年（一〇四〇）に著述されたものである。郭氏の指摘によると、この時、わずか三十歳に過ぎない劉先之のことを、宋咸が「近世の劉牧」と称していることや、その若さで黄黎献―呉秘の二代にわたる後学がいたとは考えられないと述べているが、先述の通り、劉長民が劉先之よりも少なくとも三十年前の人物であることを考えると、ようやく腑に落ちるところであろう。

以上の内容を踏まえながら、彭城劉牧と三衢劉牧の事績を時系列に整理すると、以下の通りである。

		彭城劉牧（長民）	備考	三衢劉牧（先之）	備考
真宗					
景德	元年（1004）	契丹と澶淵の盟を結ぶ。			
	二年（1005）	劉長民、任官す。「景徳二年三月試草澤劉牧**策**二道」	＊楊億『武夷新集』		
大中	祥符四年（1011）			劉先之、生まれる。	
天禧	中（1019）	**毗**陵従事建渓范諤昌「易証墜簡一巻」「大易源流図一巻」を選す。	＊陳振孫『直斎書録解題』		
仁宗					
天聖	四年（1026）	劉長民、知略が認められ、辺疆の武官に赴任す。「有文臣、以智畧易右職當邊寄者、若雍熙四年柳開、祥符九年高志寧、天聖元年劉平、四年劉牧、慶歴七年楊畋、皇祐四年蘇緘、治平二年**种**諺、三年**种**古及張亢劉几李丕諒之屬、熙寧五年三月戊戌立文武換官法」	＊王応麟『玉海』「官制」	劉先之、十六歳で進士に挙げられたものの、第せず。のち、多く書を求め、戸を閉じて猛勉強して、再挙ののち挙首として及第する。	
景佑	元年（1034）	呉秘登第し、官に就く。「呉秘、字君謨、甌寧人。景祐元年登第、歴侍御史、知諫院。以言事、出知濠州、提点京東路刑獄」	＊黄宗羲『宋元学案』巻二泰山學案「提刑呉先生秘」	「劉牧西安（三衢）人、屯田員外郎」（進士張唐卿榜）	＊『浙江通志』巻百二十三
	三年（1036）			范文正（仲淹）、饒州の知事に赴任する。先之、范文正に師事す。この頃から孫復に従って春秋を学び、石介と交友を結ぶ。	＊『宋史』本紀「仁宗二」 ＊王安石「劉君墓志」
康定	元年（1040）	＊宋咸『王劉易辨』を作る。「康定元年、自序易辨曰、近世劉牧、既為鉤隠図、以畫象數、盡**刋**文王、直用己意、代之業劉者實繁」	＊胡一桂『周易啓蒙翼伝』中篇	范仲淹、劉先之を**兗**州観察推官に推挙する。（後に劉先之通判建州となる） 范仲淹「送三衢劉牧推官之**兗**州」の詩を作る。	＊范仲淹『范文正集』
				石介、七月十八日の日記、「泰山書院記」を記す。「今先生（孫復）游從之貴者、故王沂・公蔡二卿李泰州孔中丞、今李丞相范經畧明子京張安道士熙道祖擇之門人之高弟者石介・劉牧・姜潛・張洞・李**緼**、足以相纘於千百年之間矣」	＊石介『徂徠集』「上杜副枢書」

慶歴	元年（1041）	呉秘、劉長民易十五巻を献書す。「中興書目云、新注周易十一巻。本朝太常博士劉牧撰。呉祕表進、田況序。牧字長民、彭城人。仁宗時言数者皆宗之」（『厚斎易学』）、「慶歴初、呉秘献其書于朝、優詔奬之、田況為序」（『郡斎読書誌』巻一上）	＊馮椅『厚斎易学』所引『中興館閣書目』 ＊『郡斎読書誌』（巻一上）		
	二年（1042）			十一月甲申、泰山処士孫復を以て国子監直講と為す。	＊『宋史』本紀・仁宗三
	三年（1043）			八月丁未以范仲淹參知政事、富弼為樞密副使。	＊『宋史』本紀・仁宗三
	四年（1044）			七月甲申、范仲淹、河東・陝西宣撫使に赴任。八月、富弼、河北宣撫使に赴任。富弼は劉先之を軍務の機要と文書を担当する機宜文字に推挙する。「八月甲午富弼宣撫河北」「富弼宣撫河北、奏三衢劉牧掌機宜文字。」	＊『宋史』本紀・仁宗三 ＊臨川墓誌
	五年（1045）			劉先之「送張損之赴任定府幕職序」を著す。 正月乙酉、銭明逸・章得章らの策謀により范仲淹・富弼罷職。劉先之は富弼から保州兵乱の鎮撫を頼まれ、保州に行くも、富弼の突然の罷出により、引き返して再び建州に戻る。	＊呂祖謙『宋文監』八十五 ＊『宋史』本紀・仁宗三
	七年（1047）	李覯三十九歳、『刪定劉牧易図序』を作る。	＊李覯『**盱**江集』「李直講年譜」	梅堯臣、河北保州に向かう劉先之に贈序を付す。「劉牧殿丞通判建州」	＊梅堯臣『宛陵集』所収「劉牧殿丞通判建州」）
嘉佑	七年（1062）			劉先之、「広南西路転運使」に赴任。	＊『広西通志』巻五十一
英宗					
治平	元年（1064）			四月、劉先之、荊湖北路に移る。 五月六日、劉先之卒す。「荊湖北路転運判官尚書屯田郎中劉牧、年五十四歳、以官卒」	＊臨川墓誌
	三年（1066）			葉昌齢「治平周易図義書目二巻」、『易数鉤隠図』の散佚により、この書を著す。凡そ四十五門。	＊王応麟『玉海』

二　現行本『易数鉤隠図』について

（一）改竄の迹

現在伝わる『易数鉤隠図』三巻本は、全五十五章によって構成されている。上巻は第一章〜第三十三章、中巻は第三十四章〜第四十八章、下巻は第四十九章〜第五十五章で成る。また、各章の主旨を象徴的に表した図象が一枚ずつ含まれており、上・中・下巻を合わせて計五十五図が収められている。各章の詳細を示すと、以下の通りである。

上巻

第一「太極」、第二「太極生両儀」、第三「天五」、第四「天地数十有五」、第五「天一下生地六」、第六「地二上生天七」、第七「天三左生地八」、第八「地四右生天九」、第九「両儀生四象」、第十「四象生八卦」、第十一「二儀得十成変化」、第十二「天数」、第十三「地数」、第十四「天地之数」、第十五「大衍之数」、第十六「其用四十有九」、第十七「少陽」、第十八「少陰」、第十九「老陽」、第二十「老陰」、第二十一「七八九六合数」、第二十二「乾画三位」、第二十三「坤画三位」、第二十四「陽中陰」、第二十五「陰中陽」、第二十六「乾独陽」、第二十七「坤独陰」、第二十八「離為火」、第二十九「坎為水」、第三十「震為木」、第三十一「兌為金」、第三十二「天五合地十為土」、第三十三「人稟五行」

中巻

第三十四「乾坤生六子」、第三十五「乾下交坤」、第三十六「坤上交乾」、第三十七「震為長男」、第三十八「巽為長女」、第三十九「坎為中男」、第四十「離為中女」、第四十一「艮為少男」、第四十二「兌為少女」、第四十三「坎生復卦」、第四十四「離生姤卦」、第四十五「三才」、第四十六「七日来復」、第四十七「臨卦八月」、第四十八「遯卦」

下巻

第四十九「河図」、第五十「河図天地数」、第五十一「河図四象」、第五十二「河図八卦」、第五十三「洛書五行生数」、第五十四「洛書五行成数」、第五十五「十日生五行幷相生」

太極第一

さて、各章に付されている図象は白○黒●の点と線によって描かれている。(9) 白○は奇数を表し、黒●は偶数を表す。たとえば、第一章の「太極」の場合、白○と黒●が交合しながら円状に配置されているが、それは主題通り、太極を表象している。「太極は、元炁混じて一を為すの時なり。其の炁已に兆し、无に非ざるの謂」（「其用四十有九」第十六）と述べているように、太極は二儀の気が兆し、一つに混じり合ってまだ分化していない「元気」であり、「元気」は数の規定性を内包しているが、未分化のゆえまだ表面に現れていない時である。したがって「太極に数と象無し。今、二儀の気を以て混じて一と為して以て之を画す。蓋し二儀の従りて生ずる所を明らかにせんと欲するなり」（『易数鉤隠図』巻上「太極第一」）というのである。

このように各章の内容を図象化し経文を解釈することで直観的な認識を促しているが、現行の『易数鉤隠図』所収の五十五図はもともと合計四十八図であったことが次の『読書誌』の記述から確認される。

易数鉤隠図三巻、劉牧撰。皆易の数なり。凡そ四十八図并びに遺事九、欧陽永叔の序有り。而れども其の文、殊に類せず。

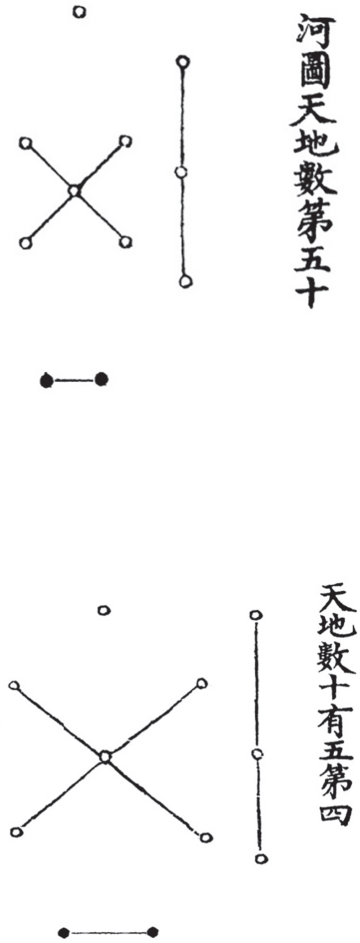
すなわち、晁公武が見た三巻本には五十五図ではなく、四十八図が収められていたのである。とすると、『易数鉤隠図』は四十八図本と五十五図本の二種の版本が並行していたということになるが、北宋の李覯は「刪定易図序論」において、次のように述べている。

世に易を治むるは劉牧を根(きわ)むる者有るに、其の説日々同じからず。因りて牧の為る所の易図五十五首を購い、之を観れば則ち甚だ複重す。仮令に其の説の善なるものあれば、猶お河図・洛書・八卦の三者の内を出でず。彼の五十二は皆疣贅なり。……別に一本有り。黄黎献之が序を為るに、頗る誕謾を増多す。（『直觀李先生文集』巻之四「刪定易図序論」）

李覯が見たのは五十五図本であったが、「之を観れば則ち甚だ複重す」と述べているように、図象の多くが重複しているとし、河図・洛書・八卦の三図の範囲を出ないものであるとして、これらの三図を除く五十二図は不要であると一蹴している。さらに李覯によると、別本が存在していたらしく、それには黄黎献の序が付いていたとされるが、其の内容は大げさで実のないものであると批判している。

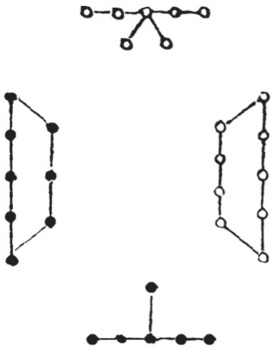
これについて郭彧氏は、四十八図本は現行の『易数鉤隠図』上・中両巻の図形の総数に符合していることから、下巻の七図は原本には含まれていなかった可能性があると指摘している。さらに李覯の指摘の通り、下巻の七図のうちの四図は、上巻の四図と重複しており、後世による穿入である可能性が高いという。それらの四図をあげると、次のとおりである。

第五十「河図天地数」（巻下）＝重複＝　第四「天地数十有五」（巻上）



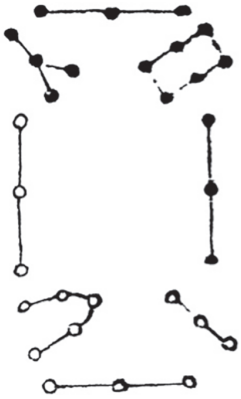
第五十一「河図四象」（巻下）＝重複＝

河圖四象第五十一



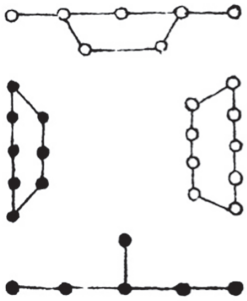
第五十二「河図八卦」（巻下）＝重複＝

河圖八卦第五十二



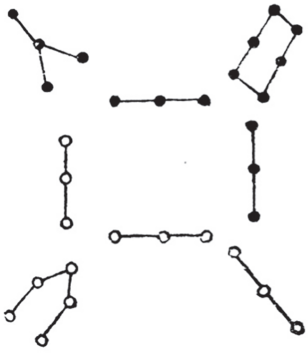
第九「両儀生四象」（巻上）

兩儀生四象第九



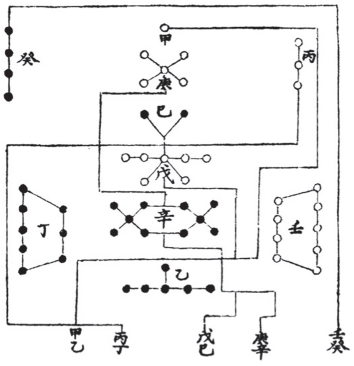
第十「四象生八卦」（巻上）

四象生八卦第十

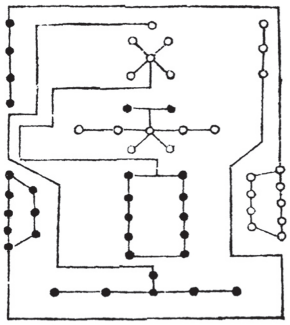


第五十五「十日生五行并相生」（巻下）＝重複＝　第十一「二儀得十成変化」（巻上）

十日生五行并相生第五十五



二儀得十成變化第十一



また、これらの四図に加え、残りの三図、すなわち巻四十九「河図八卦」、巻五十三「洛書五行生数」、巻五十四「洛書五行成数」についても、劉牧の「自序」の内容と符合せず、これもやはり後人による穿入であろうと推定されている。というのも劉牧の「自序」には河図洛書に関する言及が一言も出てこないのである。

夫れ易は、陰陽の気交わるの謂なり。若夫（それ）陰陽未だ交わらざれば、則ち四象未だ立たず。八卦未だ分かれざれば、則ち万物安んぞ従りて生ぜん。是の故に両儀変易して四象を生じ、四象変易して八卦・重卦の六十四卦を生じ、是において天下の能事畢れり。夫れ卦は聖人之を設けて象を観るなり。象は、形上の応なり。其の本を原ぬれば、則ち形は象に由りて生じ、象は数に由りて設けらる。其の数を捨つれば、則ち以て四象の由る所の宗を見る無し。是の故に仲尼の易を讃するや、必ず天地の極数を挙げて以て変化を成し鬼神を行うの道を明らかにするなり。則ち易の書為るや、必ず数を極めて以て其の本を知るを知るなり。夫の注疏の家を詳らかにするに、分経析義に至りては妙に精研を尽くすも、天地錯綜の数を解釈するに及びては、則ち惟簡略を語り、繫辞に偶せざ

るは、学者の其の義を暁り難き所以なり。今、天地奇偶の数を採摭し、太極、両儀を生じて自り下りて復卦に至るまで、凡そ五十五位、点の図を成す。逐図の下において各々其の義を釈するに之を庶覧する者は暁り易きのみ。夫れ易の道は淵邈なれば、往哲と雖も至賾に窺い難し。牧や蕞しく祖述を生むも、誠に其の狂簡なるを媿ず。然らば則ち象に定位有り、変に定数有れば、妄為の穿鑿すること能わざるのみ。博雅の君子、試みにこれを詳らきを為さん。（『易数鉤隠図』「自序」）

すなわち、「今、天地奇偶の数を採摭し、太極、両儀を生じて自り下りて復卦に至るまで、凡そ五十五位、点の図を成す」と述べているように、自序の主な内容は、次に取りあげる『易』繫辞上伝の「大衍之数」（周易正義第八章）、「天地の数」（第十章）、「易有太極」（第十一章）および説卦伝の「乾坤六子」にもとづいており、河図洛書に関する文言は皆無である。

大衍之数五十、其用四十有九。分而爲二、以象両。掛一以象三、揲之以四以象四時、帰奇於**扐**以象閏、五歳再閏。故再**扐**而後掛。天数五、地数五、五位相得、而各有合。天数二十有五、地数三十。凡天地之数五十有五。此所以変化而行鬼神也。乾之策二百一十有六、坤之策百四十有四。凡三百有六十当期之日、二篇之策、万有一千五百二十当万物之数也。是故四營而成易。……天一地二天三地四天五地六天七地八天九地十。……是故易有大極、是生両儀、両儀生四象、四象生八卦、八卦定吉凶、吉凶生大業。（繫辞上伝）

乾天也、故**称**乎父。坤地也、故**称**乎母。震一索而得男。故謂之長男。巽一索而得女、故謂之長女、。坎再索而得男。故謂之中男。離再索而得女。故謂之中女。艮三索而得男。故謂之少男。兌三索而得女。故謂之少女。（説卦伝）

さらに注目すべきは、下巻のみならず、上巻・中巻においても穿入の迹が見られる。

四象に其の成数備わりて、而して後に八卦生ず。是において坎離震兌、四象の正位に居る。五象と云わざるは、五を以て位を定むる無く、其の四を挙ぐれば、則ち五知るべし。夫れ五の上に天一を駕し、而して下に地六を生ず。下に地二を駕して、而して上に

天七を生ず。右に天三を駕して、而して左に地八を生ず。左に地四を駕して、而して右に天九を生ず。【此れ河図に四十有五の数有るのみ。】斯れ則ち二儀の生ずる所の四象なり。所謂る易に四象有るは示す所以の者なり。(10)（『易数鉤隠図』巻上「両儀生四象第九」）

括弧の【此河図四十有五之数耳】の十字について、郭氏は前後の文脈から後人が穿入した可能性があると指摘している。「斯れ則ち二儀の生ずる所の四象なり」の「斯れ」とは、七・八・九・六の四象を受けていることから、この一文は原本には含まれていなかった可能性が高い。また、次の第四十五「三才」（巻中）にも同様のことが言える。

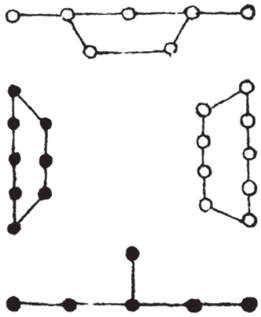
前賢、三才の義を釈するに、皆以て剛柔の両画を設けて以て二炁を布き、布くに三位を以てして三才に象る。聖人、意を率いて以て之を画するを謂う。斯れも亦た繫辞の義を詳らかにせざるなり。夫れ卦は、天の自然の象を垂るるなり。聖人【始めて之を河図洛書に得】、遂に天地奇偶の数を観、従りて之を画す。是れ八卦を成せば、則ち意を率いて以て其の数を画すに非ざるなり。略して之を試論するに、夫れ三画の卦を成す所以は、天地自然奇偶の数を取ればなり。乾の三画にして三位に分たるは、天の奇数の三つを為すが故に三位を画するなり。地の偶数の三つも亦た三位を画するなり。余りの六卦は、皆乾坤の子にして、其の体は則ち一なるが故に亦た三位の設けらるるのみ。(11)（『易数鉤隠図』巻中「三才第四十五」）

すなわち、【始得之于河図洛書】の八字も後に穿入された可能性が指摘され、これらはいずれも河図洛書説に関連づけて文意を通そうとする意図が窺われる。さらにまた、巻中の「論中」において、

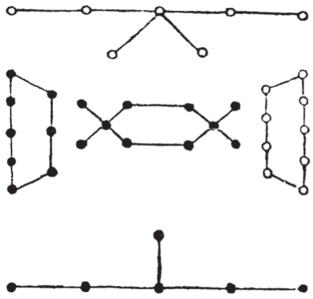
河図は四象を陳ねて五行を言わず、洛書は五行を演べて四象を述べず。（『易数鉤隠図』巻中「論中」）

とあり、河図と洛書が四象と五行を生み出す根拠となっているが、この一文は巻上に「両儀、四象を生ず、七八九六の謂なり」（巻上）とあるのと矛盾する。それを裏付けるものとして、巻上の第九「両儀生四象」における下六・上七・左八・右九の四象は、巻下の「洛書

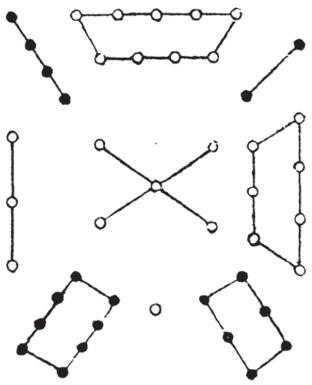
五行成数第五十四」における六・七・八・九の方位と重なることから矛盾していることが分かる。さらに、巻下の「河図四十九」では「下



兩儀生四象第九

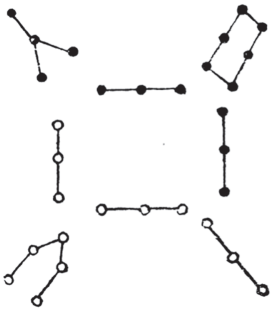


洛書五行成數第五十四

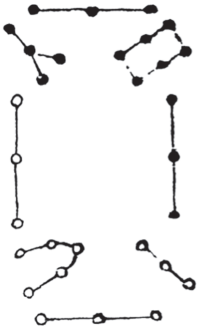


河圖第四十九

一・上九・左三・右七」と配置されており、河図は四象の六・七・八・九を陳ねるとする文意と符合しないことが分かる。また、第十「四象生八卦」は、六下・七上・左八・右九の図から分かれ出たものであり、「河図陳四象」ではなく、「洛書陳八卦之象」というべきである。したがって、第四十九「河図」における「以五為主、六八為膝、二四為肩、左三右七、戴九履一」の、いわば九宮数は「八卦之象」を陳ねたものではないということになる。郭氏は、これらはすべて後人によって加えられたものであり、現行本は「河図」「洛書」「龍図」の文字が穿入され、図の名前を変えたり、図の順序を入れ替えるなどの改竄が行われているとし、後人によって意図的に河図洛書説が盛り込まれた可能性があると指摘している。



四象生八卦第十



河圖八卦第五十二

さて先程、劉敏士の三巻本及び欧陽修の名を冠した偽序の存在について確認したが、この三巻本と偽序の成立時期を窺い知る手がかりとなるのが冒頭で取り挙げた『中興館閣書目』である。『中興館閣書目』は『読書誌』『解題』より以前に成立しており、その佚文が南宋の馮椅『厚斎易学』に引かれている。それによると、劉牧の著述について次のように記している。

中興書目に云く、新注周易十一巻、本朝太常博士劉牧撰。呉秘表進し、田況序す。牧、字は長民、彭城の人なり。仁宗の時、数を言う者、皆之を宗とす。又、周易卦徳通論一巻有り。元亨利貞の四時を論ず。又、鉤隠図一巻有り。天地奇耦の数、太極の両儀を生じてより下りて河図に至る。凡そ六十四位、之を点して図を成す。図の下において各々其の義を釈す、と。

読書志に云く、凡四十八図并びに遺事九あり。欧陽永叔の序有るも其の文、殊に類せず。呉秘は又周易通神一巻を撰し、凡そ三十四篇あり、と。注に云く、鉤隠を釈する所以なり。黄黎献、之を牧に受け、秘（呉秘）は之を黎献に受け、久しく之伝うるもの無し。因りて通神を作りて以て之を奏す。黎献は易を劉牧に学び、其の綱宗を采摭して以て略例一本を為し、之を新注周易に総す。以て通神を第十四巻と為し、略例を第十五巻と為す。此れ牧の学を為す者は集めて一書と為すなり。黎献は又以て易を牧に学び、其の隠訣を筆し、目して室中之紀一巻と為して、室中記師隠訣と題す、と。（馮椅『厚斎易学』）

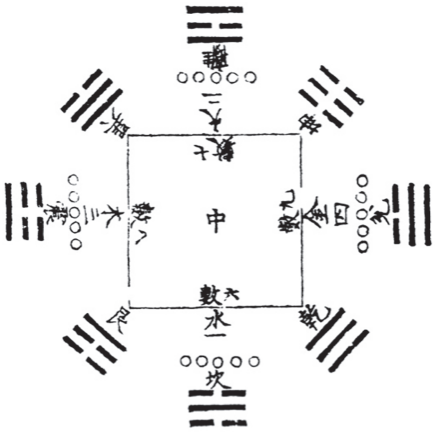
ここで注目すべきところは、『中興館閣書目』には劉敏士の三巻本や欧陽修の序の存在について言及がないということである。また傍線部に「鉤隠図一巻有り。天地奇偶の数、太極の両儀を生じてより下りて河図に至る。凡そ六十四位、之を点して図を成す。図の下において各々其の義を釈す」と、劉牧の自序を引いているが、実際の自序では、「河図」を「復卦」に作り、「六十四位」を「五十五位」に作っていることも、『易数鉤隠図』を河図洛書と関連づけと述べようとする後世の意図が窺われるところであろう。

（二）劉牧と河図洛書

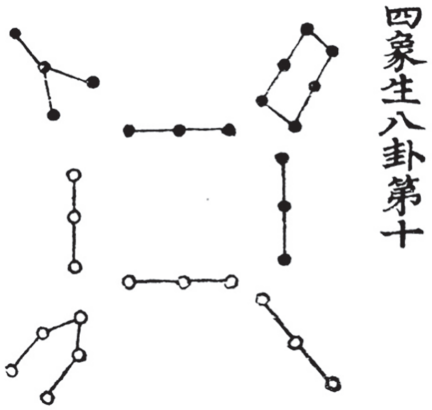
劉牧の『易数鉤隠図』は、五代末の道士陳摶より伝授された河図洛書の系譜を受け継ぐものとして知られて来た。北宋末の朱震は「進周易表」のなかで、陳摶を源流とする先天図・河図洛書・太極図の図書学の系譜を伝えているが、[12] 河図洛書は、陳摶以来の种放―李溉―

許堅―范諤昌―劉牧の系譜によって伝承されていたと知られて来たのである。ところが、劉牧の師に当たる范諤昌の易説の一部が『周易図』（作者未詳）に残されており、それについて、次の郭氏の指摘は非常に興味深いものがある。

范氏諤昌曰く、四象は形を以て之を言えば、則ち水・火・木・金なり。数を以て之を言えば、則ち老陽・老陰・少陽・少陰にして九・六・七・八なり。惟土のみ形無く、四象各々中央の土を以て之に配すれば、則ち是れ辰・戌・丑・未の成数を為すなり。水の数は六なるが故に三画を以て坎を成し、余りの三画を亥の上に布きて乾を為す。金の数は九なれば、三画を除きて兌を成し、余りの六画を未の上に布きて坤を為す。火の数は七なれば、三画を除きて離を成し、余りの四画を巳の上に布きて巽を為す。木の数は八なれば、三画を除きて震を成し、余りの五画を寅の上に布きて艮を成す。此四象、八卦を生ずるなり。（『周易図』巻下第二十）



『周易図』巻下「四象生八卦図」



『易数鉤隠図』巻上

范諤昌によれば、四象は「形」をもって言うならば、水・火・木・金に当たり、「数」をもって言うならば、老陽・老陰・少陽・少陰の九・六・七・八に当たる。そして、水の数六が分かれ、三（画）は坎卦となり、余りの三（画）は、乾卦となる。同じく、金の数九は、三と六に分かれて、三（画）は兌卦となり、余りの六（画）は坤卦となる。火の数七は、三と四に分かれ、三（画）は離卦となり、余りの四（画）は巽卦となる。木の数八は、三と五に分かれ、三（画）は震卦となり、五画は艮卦となる。これが四象の八卦を生ずる生成過程であり、それを図によって表したのが「四象生八卦第十」である。『周易図』所引の「四象八卦図」は、范諤昌の象学を反映しており、その内容はまさに繫辞上伝の「易有太極、是生両儀、両儀生四象、四象生八卦」にもとづいている。陳振孫『直斎書録解題』によると、范諤昌は天禧中人（一〇一九）に「易証墜簡一巻」「大易源流図一巻」を著していることが確認されるが、「大易源流」は、繫辞伝にもとづいて太極より次第に生成展開する八卦説を述べたものであり、河図・洛書に八卦の淵源を求めたものではないと、郭氏は主張する。邵伯温の『易学辨惑』によると、

明逸（种放）も亦た其の象学を伝う。明逸は廬江許堅に授け、堅は范諤に授く。此れ由り一は枝れて南方に伝わるなり。

とあるものの、「又、湓浦李処約より得、李は廬山許堅に得ると言う」（『直斎書録解題』）とあることから、許堅―李処約―范諤昌と、許堅と范諤昌との間に李処約があり、范諤昌は許堅より直接授かっていなかったこと、そして范諤昌以来、その一派が南方に伝わっていたことが分かる。また何よりも重要なのは、范諤昌は劉牧より後世の人であり、劉牧が范諤昌より河図洛書を授かったとする伝承関係も成立しえないということである。

以上、現行の『易数鉤隠図』のテキストの問題について述べてきたが、廓氏の主張を纏めると次の通りである。范諤昌と劉牧の事跡からして、劉牧が年代的に早く、その著述の内容からも范諤昌から劉牧への伝承関係は認められないことから、劉牧は河図洛書の系譜とは無関係である。したがって、現行本『易数鉤隠図』は後人の手によって穿入され、河図洛書説と関連づけられた改竄の跡が見られるとのことである。

終わりに

本稿は、劉牧の易学と河図洛書説との関連について、近年の新たな研究成果をもとに劉牧易の諸問題を整理したものである。従来、劉牧易の研究において、真っ先に取りあげられてきた問題といえば、劉牧の「図九書十」の説が挙げられる。河図は九数、洛書は十数をあらわすとするものであるが、南宋の蔡元定は劉牧の説を覆して「図十書九」の説を提唱し、朱熹が蔡説を推奨して以来、劉牧易は頻りにこの議論の俎上に上るようになった。

しかしながら本稿で取りあげた、戸田・郭の両氏の見解によると、劉牧易をめぐるこれまでの議論がじつは劉牧の本来的思想とはかけ離れて一人歩きしてきた現状を露呈するものであったと言える。郭氏の考察は、本稿で取りあげた劉牧問題を超え、劉牧易が示す新たな思想史的意味に及んでいるが、それについてはまた稿を改めて取りあげることにしたい。

注

（1）詳しくは、戸田豊三郎「劉牧二人説」（『易経注釈史綱』風間書房、一九六八）四二七頁～四三九頁を参照されたい。

（2）劉牧易に関する論考として、今井宇三郎『宋代易学の研究』（明徳出版社、一九五八）、朱伯崑『易学哲学史』第二巻（朋友書店、一九八八）、劉瀚平『宋象数易学研究』（五南図書出版公司、一九九四）がある。

（3）郭彧「《易数鉤隠図》作者等問題辨」（『周易研究』二〇〇三年第二期）、同「北宋両劉牧再考」（『周易研究』二〇〇六年第一期（総第七十五期）二〇〇六年）。後に林忠軍主編・郭彧導読、歴代易学名著整理与研究叢書『易数鉤隠図導読』「導読」（華齢出版社、二〇一九）一頁～二七頁に所収。本稿は、戸田豊三郎・郭彧の両氏の研究に全面的に負うものである。

（4）戸田豊三郎『易経注釈史綱』「劉牧二人説」四三三頁。

（5）楊億（九七四～一〇二〇）は、字は大年、浦城の人である。太宗の太平興国八年（九八三）十一月に秘書省正字を授かり、淳化三年（九九二）に進士に及第した。天禧年間に工部侍郎、翰林学士に進み、史館の修撰を兼任した。著述の『武夷新集』は、「暇多く、因りて十年来の詩筆を取りて、條次して二十編を為し、之を目して武夷新集と曰う」（『四庫総目提要』）とあるように、十年間の詩や雑文を集めたものである。詩

五巻と雑文十五巻の計二十巻で構成される。

（6）宋朝文武無軽重之偏、有武臣以文学授文資者。若興国三年王操、淳化二年和嶧、咸平三年銭惟演。有文臣以智畧易右職当遣寄者。若雍熙四年柳開、祥符九年高志寧、天聖元年劉平、四年劉牧、慶歴七年楊畋、皇祐四年蘇緘、治平二年种診諤、三年种古及張亢・劉几・李丕諒之属。熙寧五年三月戊戌、立文武換官法。（『玉海』巻百二十七「官制」）

（7）梅原郁『宋代官僚制度研究』（同朋舎、一九八五）、尤東進『北宋軍政史の研究』博士論文（早稲田大学、二〇一二）、閻歩克『中国古代官階制度引論』（北京大学出版社、二〇一〇）。

（8）郭彧『易数鉤隠図導読』（華齢出版社、二〇一九）十五頁。

（9）本稿で掲載する図形については道蔵本を使用しており、四庫本を参考に一部修正を行っている。

（10）四象備其成数、而後能生八卦矣。于是乎、坎離震兌居四象之正位。不云五象者、以五無定位、挙其四則五可知矣。夫五上駕天一、而下生地六。下駕地二、而上生天七。右駕天三、而左生地八。左駕地四、而右生天九。【此河図四十有五之数耳。】斯則二儀所生之四象。所謂易有四象所以示者。（『易数鉤隠図』巻上「両儀生四象第九」）

（11）前賢釈三才之義、皆以設剛柔両画、以布二炁、布以三位、而象三才。謂聖人率意以画之矣。斯亦不詳繫辞之義也。夫卦者、天垂自然之象也。聖人【始得之于河図洛書】、遂観天地奇偶之数、従而画之。是成八卦、則非率意以画其数也。略試論之、夫三画所以成卦者、取天地自然奇偶之数也。乾之三画而分三位者、為天之奇数三、故画三位也。地之偶数三、亦画三位也。余六卦者、皆乾坤之子、其体則一、故亦三位之設耳。（『易数鉤隠図』巻中「三才第四十五」）

（12）「陳摶以先天図伝种放、放伝穆修、修伝李之才、之才伝邵雍。放以河図洛書、伝李溉、溉伝許堅、堅伝范諤昌、諤昌伝劉牧。修以太極図伝周敦頤、敦頤伝程頤程顥。是時張載講学於二程邵雍之間。故雍著皇極経世之書、牧陳天地五十有五之数、敦頤作通書、程頤述易伝、載造太和三両等篇、或明其象、或論其数、或伝其辞、或兼而明之」（『漢上易伝』「進周易表」）

Some Issues in the Liu Mu's Interpretation of the *Yijing* :

With Reference to the *Hetu Luoshu*

Hyeon SHIN

Abstract

In this article I examine the relationship between Liu Mu 劉牧's interpretation of the *Yijing* 易経 and the theory of *Hetu Luoshu* 河図洛書 based on previous studies.

Liu Mu is well known for promoting the theory of *Hetu Luoshu*, which is derived from a school of Chen Tuan 陳摶 who was a Chinese Taoist of the late Five Dynasties and Ten Kingdoms period. But According to Guo Yu 廓彧's research works, it said that Liu Mu's study was not concerned with the theory of *Hetu Luoshu*. The main reason for this is that Liu's *Yishugouyintu* 易数鉤隠図 is included several contexts which was forged by later students, that differs from original version. It is assumed that it is intended to combine *Yishugouyintu* with the theory of Hetu Luoshu. In addition, the genealogy of *Hetu Luoshu*, which is said to have been handed down from Fan E Chang 范諤昌 to Liu Mu, is not recognized as a historical fact in view of the tracks of Liu Mu's personal history.

Guo Yu's argument is very convincing enough to disprove the established theory and it is possible to break new ground in Liu's interpretation of the *Yijing*.